

感銘を受けた教材文

大阪大学名誉教授 宮地 裕

宮地 裕

1924年、東京都生まれ。国語学者。大阪大学名誉教授。光村図書小学校・中学校国語教科書編集委員。主な著書に、『現代表現考』（共文社）、『新版文論』『敬語・慣用語表現論』（ともに明治書院）などがある。

教科書にあるから教材文というが、もちろんその全てが教材文として書き下ろされたものではない。教科書に採らせてもらっている古今の文章の中には、あまり手を加えられていないものもあるが、一方には、表記を含む一字一句に至るまで検討を重ねて、初めて掲出に至るものもある。日本語の表記法——漢字仮名交じり文という複雑な表記法——と、学校教育での漢字の制約に配慮しながら本文を策定していく。それはほとんど研究的なテキストクリティーク（※）に匹敵する作業である。次代を担う青少年の頭脳と精神のために、編者たちは力を尽くす。

しかし、ここではその問題に深くは踏み込まないで、でき上がった教材文自体について、少し述べることにしたい。——この、いわば礎石の積み重ね、土台造りの努力に少しばかり言及したのは、そこにも私は感銘を受けることがあったということに一言ふれたかったまでのことである。——

今回の新版のうち、文学的文章の新教材は、一年に荒川洋治「はじめての詩」、鎌田實「雪とパイナップル」、安東みきえ「星の花が降るころに」、二年に椎名誠「アイヌプラネット」、馬場あき子「新しい短歌のために」、伊勢英子「旅する絵かき」、三年に浅田次郎「蟬の声」などがある。いずれもなかなか読みごたえのある文章だが、本誌の特集でも取り上げられているので、そちらに譲るとして、本稿では、特に感銘を受けた（久しく受けている）一作品を取り上げることにはしたい。

銘を受けることがあったということに一言ふれたかったまでのことである。——

その一作品とは、第一学年、米倉斉加年さんの「大人になれなかった弟たちに……」である。文章も、自筆のその挿絵も秀逸なものだと、折にふれて私は感じてきた。昭和六十二（一九八七）年度版以来の教材だから、もうずいぶん多くの人の目にふれ、評価も定まったものがあるのだろうし、生徒たちはもちろん、学校関係者その

の心に立ち返って、この痛切な思いを述べられている。

その後の六十余年を通観すれば、私は自分の二十歳前後の数年の体験が、自分にとっていかに重いものであったかを、（多くの人がそうだろうと思うが）改めて思い知るのである。当時はまだ子どもだった米倉さんにも、その深い体験が今なお胸底に息づいているのではあるまいか。この文章は、そういう息遣いを感じさせる。

米倉さんは私より一世代（十歳）若いから、同じ戦争体験者ではあっても、軍歴のあるなしとか、空襲を受けた経験の有無など、体験の質の違いがあることは言うまでもない。たまたま、わたしの弟の一人は米倉さんと同年なので、つい重ねて考えてしまうが、若い時代の一世代の違いは大人と子どもぐらいの隔たりがあるものだし、戦時中のそれは一段と大きなものがあつたように思われる。陸軍の軍歴一年で仙台の第二師団から復員した私と、小学校の高学年で学校の疎開先から帰宅した弟とは、その戦争体験に大きな違いがある。しかし例えば、疎開させられた小学生たちも、それに疎開先でずいぶん不自由でひもじい思いをしていたのだということは、意外の感をもつて弟から聞いたことであって、今も私の胸底にある。弟と同年の米倉さんは、当時まだ小学校高学年の児童だったわけだが、その体験は深刻なものである。

教科書には米倉さんのたぶん教材文執筆の頃のものと思われる顔写真があるから、ついその大人の眼で書かれた教材文だろうと思ってしまうかもしれないし、それはそうに違いないのだが、米倉さんは子どもの



である。

弟は生まれて間もないのですが、いつも泣かないで一人でおとなしく寝ていました。母は穴を掘りながら、ヒロユキがおとなしいから助かる、と言っていました。

（中略）

ときどき配給がありました。ミルクが一杯、それがヒロユキの大切な大切な食べ物でした……。

（中略）

母は、よく言いました。ミルクはヒロユキのご飯だから、ヒロユキはそれしか食べられないのだからと——。

でも、僕はかくれて、ヒロユキの大切なミルクを盗み飲みしてしまいました。それも、何回も……。

※古典などの定本を決めるため、数種の異本を比較研究すること。

防空壕の穴掘りは、お母さんにはずいぶん厳しい作業だったろう。その場所の土砂などの状況にもよるが、スコップで一掘り一掘り、汗まみれになって掘っていく、さぞ過酷な労働だったであろう。

私は、実は仙台の青葉城址の真下、昔、城の堀の役割をもっていた小さい川の、その水面から数メートル上あたりの岩壁を鶴嘴で掘って、自分たちの逃げ込む防空壕を作った経験しかないのだが、当時の高専・大学の学生上がり、ひよろひよろの陸軍予備士官学校特別甲種幹部候補生たちには、決して楽な仕事ではなかった。しかも、数か月後アメリカの空軍機が水平線のかたの空母から飛び立って仙台を襲ったとき、

この防空壕は直ちに役に立ったのだから、顧みて思えば、敗残の深い記憶の一つなのである。

その後六十余年が経ったが、今から二十何年かの昔、仙台での国語学会の折に、私は一人ここを訪ねた。人を誘う気にはなれなかった。行ってみると、そこは草木の生い茂った堀になっていて、青葉城址の足下ながら、深山のせせらぎの趣きがあった。昔の姿を察することはできたが、意外に狭くて貧弱な堀であって、藁や草木に覆われていた。流れているはずの小川も、よくは見えない湿地帯であった。昔の風景や面影は、しばしば、こんなふうに記憶とは異なる現実として、眼前に現れるものなのである。

米倉さんのそのときの思いは、教材文の最後の一文「僕はひもじかったことと、弟の死は一生忘れません。」に集約される。私も準じて言わせてもらえば、「ひもじかったことと、先輩・友人たちの死は一生忘れませ

ん。」とつぶやきたい。

米倉さんの文章の次の部分にも、私は感銘を受けた。

あまり空襲がひどくなってきたので、母は疎開しようと言いだしました。それである日、祖母と四歳の妹に留守番を頼んで、母が弟をおんぶして僕と三人で、しんせきのいる田舎へ出かけました。ところが、しんせきの人は、はるばる出かけてきた母と弟と僕を見るなり、うちに食べ物は無いと言いました。僕たちは食べ物もらいにいったのではありません。引越しの相談に行ったのに。母はそれを聞くなり、僕に帰ろうと言って、くるりと後ろを向いて帰りました。

そのときの顔を、僕は今でも忘れません。強い顔でした。でも悲しい悲しい顔でした。僕はあんなに美しい顔を見たことはありません。僕たち子供を必死で守ってくれる母の顔は、美しいです。僕はあのときのことを思うと、いつも胸がいっぱいになります。

この時の、まだ子どもだった米倉さんの思いは、痛切なものと哀切なものとも言えるだろうが、そのすべてをひっくり返して

ういうものなのだろうと思う。

ヒロユキは病気になりました。僕たちの村から三里くらい離れた町の病院に入院しました。

(中略)

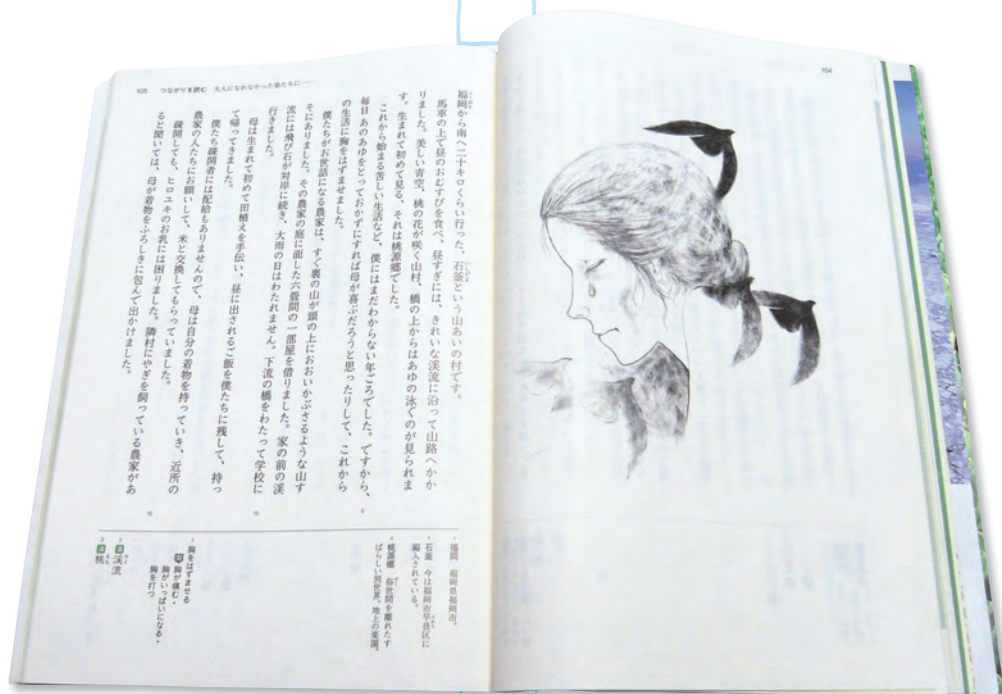
十日間くらい入院したでしょうか。ヒロユキは死にました。

(中略)

弟はその小さな小さな棺に、母と僕の手で寝かされました。小さな弟でしたが、棺が小さすぎて入りませんでした。

母が、大きくなっていったんだね、とヒロユキのひざを曲げて棺に入れました。そのとき、母は初めて泣きました。

切々と胸に迫る文章である。書かれているのはそのときの母の哀切な心情だが、米倉さんの母を想い弟を想う心情が、われわれ読者の胸に響く。離別・死別の悲痛な思いは、ここかしこに限りもなくあるこの世の中だから、一般化してしまえば何の変哲もないことだろう。しかし、一つ一つの具体のもつ凄みは深く鋭いものがあることを思わずにはいられない。



読む者の胸に切々と迫るものがある。

私の食糧難の経験、腹がへって辛かった記憶は、昭和十八年度の高等学校の寮生活一年と軍隊生活の一年ほどの中にもあった。戦後の二、三年の生活の中にもあった。厳しい軍隊の訓練で、腹がへるのは楽ではなかった。耐えかねて干し大根を盗んだ男がいて、小隊（予備士官学校では「区隊」と言った）の全員が隊長から一晩きつい説教を食らったこともある。そのときは数時間の説教を全員が食らい、自己批判をさせられて済んだが、その男は、数日後の夜間訓練のとき、小隊付きの下士官に、少し離れた闇の中で、こっぴどくやられていた。その下士官の言い分は、下士官仲間から「お前の小隊にはひどい生徒がいるなと馬鹿に

米倉さんの文章に感銘を覚えながら、私は十歳の隔たりを考えさせられた。戦時中の共感ということよりも、幼かった頃の米倉さんのものの考え方や感じ方に、私は感銘を覚えているのだと思われる。教材文であってもなくても、真情の表白に感銘を受けること自体、人の心の奥底にある情感によるのだと思う。教材文の深い意味は、読解や鑑賞を通して、筆者の心の奥底に観入するときに、はじめて「わかる」ものであろう。逆に言えば、読む者が筆者の心の奥底に観入し得たときに、そこに「感銘」が生じうるのだろうか。「感銘」とはこ